

## 「キャンプ・シュワブ・ゲート」

2015年11月04日

安倍政権は辺野古新基地建設を強行しようと工事の着工を始めた。反対する沖縄県民は連日、キャンプ・シュワブ・ゲート前で非暴力の座り込みをしている。これを排除する沖縄県警の機動隊ともみ合い、怪我人も出ている状況である。私のメールに下記のような実情報告が送られてきた。

「10月31日（土） ダンプが連なってやってきた。案の定二見の反対住民約30名はすぐに壁側に追いやられてしまった。メインの工事車両ゲートでは二見の成功で余裕を見せる機動隊。ゆっくり排除を始める。ごぼう抜きしては少人数ごとに壁に囲い込む。しかし機動隊の誤算は囲いから何人も抜けだしダンプの前に立ちはだかるのでなかなか規制ができない。その攻防が約1時間続き、機動隊に疲労が見られる。この攻防で女性が足にけがを負い病院に運ばれる。何人もの女性から機動隊のセクハラ行為の苦情が多く寄せられている。ここで相変わらずの機動隊の暴力に抗議するため、新ゲートを座り込みで封鎖。当然機動隊は排除を始める。しかし怒りを持った反対住民を止められるはずがない。機動隊はついに指揮を執る山城博治さんに襲いかかり逮捕するという暴挙にでる。山城逮捕での攻防でまた一人頭にけがを負う。この暴挙に反対住民の怒りは頂点に達し、收拾がつかない状態になる。しかたなく県警は山城さんを釈放した。その後、新ゲートを封鎖しての抗議集会は10時過ぎまで続けられた。

ゲートでの激しい封鎖行動に恐れを抱いた安倍政権は、東京の警察本部から100~200名の機動隊を11月2日、月曜日に送り込むことを決定したという。県民と意志が全く通じないであろう東京の機動隊の暴力で本当に死人がでるのではと危惧する。県民の意志をついで、これだけ反対行動を展開しているのに政府には届かない。その悔しさ、もどかしさに山城博治さんが声を詰まらずシーンもみられた。」

報告のように、沖縄県警の機動隊は暴力的でセクハラもあるが、ほとんどが地元出身者で、反対住民の排除を誇りを持ってできる仕事とは思っていない。地元民同志の「あうんの呼吸」があるという。そこで、安倍政権は県外の機動隊を導入する方針を固めた。問答無用の力で抑え込もうという訳である。沖縄をどこまで貶めるのであろうか。沖縄には「肝苦しさ（ちむぐりさ）」という言葉がある。はらわたが煮えくり返るという意味である。まさに、「ちむぐりさ」である。

沖縄は琉球王朝の独立国であった。武器を持たず、交易によって、穏やかな国造りをしていた。薩摩藩に支配され、明治の廃藩置県で沖縄県に組み入れられたが、二流国民として蔑まれた。戦争末期、4人に1人が死ぬ悲惨な沖縄戦に巻き込まれた。戦後は、米国の施政権下に置かれた。日本にある米軍基地の74%が沖縄に集中している。1972年に本土復帰したが、米軍の事故、米兵による事件、強姦は数知れない。不平等な地位協定によって、公正な裁判も行われていない。日本、米国による構造的な差別の中に置かれ続けている。県民の怒りはどれほどのものであるか。

名護市長選、沖縄県知事選、衆議院選の全てにおいて、辺野古新基地建設反対の議員を選出した。翁長県知事は米国議会に行き、国連人権理事会に行き、沖縄が受けた人権無視の実情を訴え、沖縄の心を伝えた。民意を背景にし、法的手続きを踏まえて辺野古新基地反対の運動を展開している。にもかかわらず、強行しようとする安倍政権はどこを向いているのか。日本の民主主義はどこへ行ったのか。「アベ政権を許さない」だ。